

松本清張「地方紙を買う女」論

山口 政幸

1、三つの層からの働きかけ

松本清張「地方紙を買う女」（1957年4月、「小説新潮」）には、三つの異なる層にある男たちからの、ヒロイン潮田芳子への働きかけ、アプローチが内在していると考えられる。一つはタイトルにも含まれる、作品のメインを形づくる小説家杉本隆治との絡みの部分。これは、「地方紙」という、ローカルメディアの繋がりの中に登場する、読者と作家の関係性から始まり、やがて杉本によって意図的に繋がりを持たれることになる、客とバーの女給の関係へと発展されていく。もう一つは、潮田芳子によって殺害される庄田咲次との関係性。これは庄田の加害者としての一方的な強要の有り様が、作品の末部に置かれた芳子の「遺書」での告白を通して明らかにされ、殺害の動機を構成する。そして最後に注目すべきは、芳子の夫の存在である。それは満州に兵隊として行き、そのまま戦後ソ連に抑留された元兵士として、いま日本に向けて帰国しつつあることが、先の芳子の告白と、彼女の見る幻視の中に現れている。

仮に芳子の接した時間軸に置き換えてみれば、戦中からの夫、その戦後の不在の時につけ込んで、肉体を強要し関係を保持し続けた庄田咲次、そしてその庄田を殺した後に、一つの事件としてそれを暴くために、彼女の前に現れた作家の杉本、という順になり、あえてそれに経過としての時間の厚みをつけるなら、少なくとも杉本との3月から晩春へのわずか数カ月の期間が最も短いはずだろう。しかし、抑留され続けている夫と、万引きの嫌疑をかけた上、暴行を働き関係を維持した庄田咲次との「時間」になると、それはその永さにおいて、どちらが永いものか、にわかには判断できない。なぜなら、夫との結婚生活は、わずか「半年」にすぎなかったと、潮田芳子は言っているためである。それより以前の二人の関係した時間は、結局わからないのである。

もしこの小説を、発表された1957年という50年代の事象に合わせることが可能なら、夫との時間の裂け目はかなり深刻なものに及ぶはずである。終戦の前年である1944年に、夫が出征したのなら、その不在の時間は実に12年にも及ぶからだ。

この作品とまったく同時期に書かれた「一年半待て」（1957年4月、「週刊朝日別冊」）でも、そこには夫とのすれ違う時間が流れていた。が、この「地方紙を買う女」の潮田芳子の担った戦後的な位置づけは、「一年半待て」のような夫婦間の不和の状態でなく、まさに抑留された家族を待つ、岸壁の妻に強いられた文字通りの不在の時だった。言い換えるなら、それは、新婚

間もない夫婦の間に、戦争による長い政治的な「時」が災禍として侵入してしまったことだったとも言えよう。

もしこの夫の乗る船が、1956年の10月に調印された日ソ共同宣言に基づき実施された、いわゆる最後の引き上げ船「興安丸」による帰還を指しているのなら、これから殺そうとする庄田の横顔に「かつては聡明な額だと思い、たのもしげな眼と好ましい鼻だと考えた一時期もあった」と認めざるを得ない潮田芳子の屈折した心理は、複雑な陰影を帯びるものとしなければならない。

20才だった妻も、30才を越え、しかも夫の帰還は永らく絶望視されてもいた。そういった抑留の歴史をここに垣間見ることができるが、それではそうまでして待ったはずの妻は、なぜ目前に帰るはずの夫を待たずに「毒」をあおったのだろうか。彼女は、あくまで、素人探偵である作家の手によって、暴かれた犯人としてあっただけのはずだ。あるいは、夫と送るこれからの未来は、人を殺めたという重い罪によって押しつぶされなければならなかったのか。

確かにそこには犠牲者の一人として、直接手を下すまでもない人間が含まれてもいた。しかし、庄田の情婦である福田梅子に対して、芳子が罪悪感を抱いたとは思われない。

むしろ、庄田の嫉妬を煽る手に「いくぶんでも、のった」という説明できない心理を言い表した口吻の方が、そこでは重い意味を持つだろう。もし、彼女が、帰ってくる夫の前から、すすんで身を隠さなければならなかったと考えたならば、それは一時的にもせよ、夫以外の男性に抱かれたゆえの、負い目であると考えるのが、もっとも自然かもしれない。そうすると、そこには、近代国家のうちに、女性たちにのみ強いた貞潔の観念の支配性を読み取ることも、あるいは可能になるだろう。

一方で、先述した「一年半待て」のように、貞操はおろか、夫を殺害してまで新たな結婚に踏み出そうとする大胆な「妻」がすでにヒロインとして登場していたことを思うと、空想めいた思い付きだが、はたしてヒロインである塩田芳子は、やすやすと毒をあおったのだろうかという疑念さえ浮かんで来る。穿った見方をすすめれば、まんまと杉本隆治の目を晦ませたのち、帰還した夫との生活をはじめたとする想像も、それほど困難ではないのではないか。むしろそうしたのちのドラマが用意されているのなら、邪魔者である二人の男たち、一人は性的加害者として殺す相手、もう一人は小説家としてのプライドから殺害の事実を暴こうとする厄介な存在という、ともに芳子自身にとってしつこく付き纏う不都合な男たちをきっぱりと清算し、振り払い、姿を晦ました物語として読むことも可能だろう。

実際、芳子は渋谷の店に働きながら、帰ってくることが決まった夫の乗る「船」を空想裡に思い浮かべずにはいらなかったのだが、それは次のようなものであった。

彼女の眼には、一隻の船が波を裂いてよぎっていた。近ごろは、夜も昼も、それが眼にうつる。ドレスの胸に手を当てると動悸が苦しいくらいに打った。

マスターやマダムの開店まえの訓示めいたやり取りを聞きながら、芳子は「もう、この店もよそう」と思いつつ、この新たに開けるはずの未来を思っていたのかもしれない。

同じように、情死死体のその後の身元を伝える記事をみて、「この新聞もつまらなくなった」と感じる時、彼女が思い浮かべるのは、やはり波間をすすむ「船」であった。

言うまでもなく、そこには、愛した夫が長い抑留の生活の疲れを見せて、乗っているはずであった。永すぎる不在の時が、この日本へ航路をむける船が作る無数の波間に溶けていくかのように、夫婦は徐々に近づいていく。

しかし、潮田芳子はそれ以上、かつて一緒に住んだ夫の事を、思い浮かべることはない。まるで殺人という、抱えてしまった虚無に押しつぶされたかのように、彼女のこれからあるはずの未来への喜びは、表されることはないのである。「またしても彼女の眼には海を走っている船が明るく映った」とあるが、その明度に彼女のころはともに付き従い同感できていたのだろうか。永い不在の果てに、ようやく帰国することができなかった「愛して」いたはずの夫に一度も会うことなく、彼女が命を絶った本当の要因とは、いったい何であろうか。

2、「地方紙」という世界

この小説は、ヒロインである潮田芳子が、自ら犯した偽装心中の犯罪が載るはずの地方新聞の購読をするところから始められる。彼女は東京から二時間半くらいかかるK市にある、臨雲峽という山林に、庄田を、その情婦である福田梅子とともに誘い出して、二人に毒入りの食物を与え、心中したように見せかけ、殺害した。その犯行へと向かって行くK市の町の冬の明るい山々の風景が、芳子の寡黙な眼に映じてゆくのはことに印象深い。

この偽装された心中というトリックは、この作品の直前に書かれた『点と線』（1957年2月～1958年1月、「旅」）でも使われていた。というより、警視庁の警部と地元のベテラン刑事とが、苦労して解決する犯罪が、そもそも汚職を隠蔽するための男女の心中偽装であった。芳子も『点と線』の犯人とまったく同じ手法の犯罪を犯すわけだが、ここでの心中は、親密でもない男女が、同じ場所で死んでいたということをきっかけに、解決に導かれることはない。

この偽装心中を、心中としたのは、逆説的に響くが、それを心中として報道したメディアによるものだった。『甲信新聞』という地元では信頼される有力紙での、活字の働きによって、二

人の男女の死は、「邪恋の清算」という事実と異なる方向へと向かい、やがては人々の記憶から消されていくものとなるはずであった。

むしろ正確に言うならば、それとても警察の捜査による判断に基づくのは、言うまでもない。

が、押さえておきたいのは、ここでのメディアは、警察の表面的な捜査に疑念を持ち、解決に至る道筋を持つようなそれではない、ということだ。

それが分かるのは、彼女が眼にした具体的なこの地方紙の平板すぎる内容である。そこには事件らしい事件はない。その紙面は、火事や校舎についてのおよそ平凡すぎる地方の記事で埋め尽くされていた。それは、普通には、こうした地方では、事件らしい事件というものがほとんど起こらないということの意味している。少なくとも、それはこの地方に限定されたニュースとして人々の口の端に上るものの、中央へと波及していくような深甚な内容を持たない、安全な記事たちであった。山深い地方の、限られた人口しかない地域では、そうそう大きな事件や犯罪が起こるはずもないのである。

偶然立ち寄った駅前の食堂で、給仕女が置いた『甲信新聞』の「泥くさい活字」から潮田芳子が瞬時に読み取ったのも、こうした動きのない地方の中で埋もれる事件性の兆候であった。あるいは、『甲信新聞』に表れているような、批評性の無い世界の中で起こる、小さな犯罪群と言い換えてもいい。

いずれにせよ、この小説のサスペンスを形作るものの一つの要素として見逃せないのは、潮田芳子の、こうした沈着な判断力と実行性であろう。

東京から離れた地方を選んだのは、臨雲峡という景勝で、かつ自殺や心中の名所でもある山峡が当初の計画からあったためだが、そこは彼女の犯意を、平凡な片隅の記事にしてしまう常態化したメディアも都合よく存在していた。その『甲信新聞』という「その県では有力な新聞」は、都内に販売区域を持たないため、芳子は「直接購買者」として本社へと送金をはじめた。芳子はたまたま目にした地方新聞をそのように利用したのだが、その際にわずかな過ちをおかしてしまう。言うまでもなく、それは、小説家杉本隆治を引き寄せてしまったことであった。

3、地方紙に書く男

杉本隆治という存在の出現は、彼女にとって予想外であり、ただちに脅威そのものへと変わった。彼女は、連載小説の愛読者を装って、甲信新聞社に、定期購読を依頼する。無論、彼女にとって、「地方紙」の一角を地味に飾っている時代小説など、そもそも興味の対象外であった。つまり、潮田は、はじめから不読の読者だったわけである。

杉本隆治という小説家が、疑念に思ったのは、この、実際は読まれることのない自作に対する、自信ゆえだった。

「あれが、面白くないとは」と呟きながら、彼の職業意識は何とかプライドの平衡を保とうとする。そして、「これは、おれの小説を読みたいから新聞をとったのではなさそうだ。それはただの思いつきの理由で、実際には何かほかのことを見たかったのではないか」と考えていくのだ。

そして、彼は、探偵社を使って、女のことを調べ上げ、彼女のもとへと会いに行く。彼女は本名のまま働いていた。杉本にとって、水商売で働く芳子は、ただの物好きな客として会いに行くことが容易な存在だった。

事実初めて訪ねた杉本に対して、芳子はまるで無警戒な態度をとる。が、彼女の勤めるバーの名前が「ルビコン」という名で暗示されているように、ここから杉本は明らかに潮田芳子の隠された犯行を、暴く側の人間へと変貌していく。

そして、その際に使われているのが、芳子が自身の犯行の経過を知るための手段として購読した『甲信新聞』が担う同じ機能性だったのに、注目される。

杉本隆治は、地元出身の××大臣がK駅前で演説をしている『甲信新聞』の切りぬきをさりげなく席に置き忘れ、「自分に見せるために置いていったものなのか」という疑念を、芳子に植え付ける。

潮田芳子が、犯行を行った2月18日に食堂で偶然見た『甲信新聞』に載せられていた記事は、先述のように、五戸を焼いた火事、村役場の吏員の公金の横領、学校の分校の新設、県会議員の母親の死去といった、およそ「ひなびた新聞」にふさわしい出来事だけが、掲載されていた。

言うまでもなくそれは、中央紙などでは決して取り上げられることのない、ニュース性の乏しい内容なのだが、日本の地方新聞とは、こういった紙面を律儀に作り出すことで地域連帯を高め、大手新聞の地方参入を防いできたと言えるのである。したがって、そこに、同郷の出身者である新大臣の帰郷が、大きく取り扱われる余地はじゅうぶん生まれるだろう。実際、潮田芳子が横切ったK市の駅前でされた演説は、写真入りで大きく『甲信新聞』を飾り、その場に居たはずの芳子の心理を動揺させるのにはじゅうぶんだった。地方新聞の特徴である平凡すぎる記事たちは、こうして犯人とそれを暴こうとする探偵の役割を担った人物双方に、等しく受益をもたらすものとなる。

「地方紙を買う女」の「地方紙」の部分は、このように、作品の前半部分での杉本隆治との関係において、おもに費消されていく。

この小説をミステリーの方から評価するとすれば、犯人を追う側の探偵が、意外なところから創出される、という点が最も重要な要素の一つとなろう。作家を追う読者は一般的だが、

読者を追う作家は、日常生活においても、稀なはずである。それより意外なのは、やはり地方紙へ娯楽連載物を載せるという日本的な作家の営為から、この着想が生み出されていることだ。おそらくそれはほかの作家では思いつかない、松本清張ならではの独創的な感覚から導き出されたものだろう。

「自分の小説のせいで、新聞が一部でも売れなくなったという、はっきりした現実」を受け止める杉本隆治の作家的良心は、あのように売れていた松本清張という作家を蔭で支えていた、おそらく職業意識にきわめて近いものだったに違いない。現代作家である宮部みゆきも言っているように、地方の新聞に連載小説を載せるのはいまでも「独特の心の距離の近さ」が作家には感じられることらしい。言うまでもなく杉本の執筆する「野盗伝奇」は、清張自身がこの小説に先行して、「地方新聞」である「西日本スポーツ」に連載した作品だった。

『甲信新聞』は、東京に販売網を持っていない新聞社であった。県下を超えて複数の県にまたがるブロック紙と呼ばれるものは比較的規模の大きい新聞紙であるが、県紙と呼ばれる、その県を代表する有力紙でも、東京に販売網までは準備していない場合が多い。単に、「有力な新聞」と語られている『甲信新聞』がどれにあたるかわからないが、いずれにせよ、地域限定の販売網しか持たないというのが、当時の地方紙の特徴なのだ。

言い換えればそれは、東京とは近接した地域でありながらも、明らかに首都とは断絶化された報道メディアだったということである。それゆえに、東京とY県を横断できる存在としての、娯楽物を「地方紙に書く作家」が召喚されなければならなかった。でなければ、芳子の犯した「ありふれた、平凡なケース」とされる心中事件に疑いをもち、真相を見つけることが可能な探偵が、出て来られる余地が無い。

要は、東京に在住しながら、地方とメディアを介して行き来する存在として、明治以降の日本の文壇が育て上げた、娯楽連載小説を書くのにふさわしい書き手が選ばれたということだが、それは中間的な文壇層で営々と仕事をこなしていた当時の松本清張なるがゆえに発見され、創案されたものであるのに、違いないということである。端的に言って、清張は、杉本と自分を、その自己卑下の部分から、同一化していると考えてよいだろう。この「地方紙に書く」作家が探偵へと変貌する話は、のちに、『網』（1975年3月9日～76年3月17日、「日本経済新聞」）という作品によって拡大され長編化されていくことになるが、旧軍部が絡んだとされるこの作品は、昭和50年代ではすでに時代性を逸し、平板な仕上がりとなっている。

4、ヒロイン芳子の投げかける謎

しかし、当時の清張の関心は、自身の投影に近い杉本より、謎めいた印象を読者の上に投げかける潮田芳子という、ヒロインの方だったと考えられる。

参考として考えたいのは、やはり先述の「一年半待て」である。これは一事不再理のトリックを用いたものとして名高い作品だが、同時にそれを行使する女の情念が問題になる作品でもある。簡単にまとめると、夫からの暴力にさらされた須村さと子は、ついにその夫を殺すが、正当防衛を勝ち取り、執行猶予とされる。しかし、それは自身の愛した岡島との結婚を望んで、彼女が周到に計画した犯罪だった。岡島の告発によってそれがわかっても、一事不再理の原則から、さと子を裁くことはできない。が、彼女の誤算は、事実をつかんだ肝腎の恋人が彼女のもとから去ってしまったことだった。

先に述べた通り、「地方紙を買う女」でも、ヒロインである潮田芳子は、夫との再会を果たすことなく、自ら果てる。ちょうどそれは、夫殺しをした須村さと子が、「一年半」待たせたはずの誠実な恋人である岡島と、結ばれないのと同様である。悪に手を染めた女は、ともに結婚生活という新たな幸福の場を得ることはできないのだ。たとえそれが、ダニのように自分にまといつく、夫以外の男を殺すことであったとしても。両作品を一様に眺めると、こうした結論に導かれるかもしれない。

しかし、潮田芳子には、須村さと子にはない、不安の要素がある。それは、予想外の夫の変貌という事柄だった。ソ連から帰国し抑留したものを待っていたのは、彼らを温かく受け入れてくれる社会よりも、彼らを拒否するそれだったのは、多くのシベリアからの引き揚げの当時の文献が語っていた。と同時に、抑留者自体も、数年にわたる苛酷すぎる抑留の体験から、さまざまの変貌を遂げていた。

ソ連という国の崩壊と、共産主義国家の事実上の世界からの消失から、年をおうごとに当時の日ソの緊張関係を把握しづらくなっているが、「アクチブ」と呼ばれた最も過激にスターリン讚美に傾いた行動集団と、彼ら抑留者が自身で作っていた民主化のためと称した「日本新聞」、そしてその編集責任者であり「シベリア天皇」とまで呼ばれた浅原正基という名だけを、ここでは挙げておこう。そうした教育を受けた元日本軍の兵士は、激烈な共産主義者へと変貌して帰国したのも事実なのである。あるいは、そうでもしなければ、彼らは帰国を許されなかったとも考えられよう。

すでにこの小説が発表された1年前の1956年には、公式にソ連内部でもスターリン批判が行われているので、当初のシベリア帰りのイメージをそのまま小説の状況へと当てはめることはできないが、芳子という待ち続けた妻が、夫というものへの具体的な感触を何一つ想起しない

でいるのを、ここでは改めて見直す必要があるのではないか。それは、一種不可解な事実として、読者には映る。飯田祐子が指摘しているように、確かにそこには「わたしは、夫をどうしても欲しいのです」という声は語られているだろう。しかし、そこには、声に見合うような愛が見られないのではないか。先に引用した幻想の中で思い浮かべる夫に、まるっきりその容貌というものが欠けているのも、芳子のような立場に置かれた「妻」の、むしろ自然な営為のようにも感じられる。突飛な比喻かもしれないが、小津安二郎監督の『東京物語』（1953年、松竹）で、原節子が演じる戦争未亡人である紀子は、亡夫の事を思い出さないうちもあるんですと、舅である笠笠衆に自分の真情を語っていた。そして、続けて彼女が言うのは、何かを待っている、自分に対する怖さだった。

先述の通り、芳子はその愛する夫に再会する前に、自ら命を絶たなければならなかった最大の理由が、強要された肉体への罪障感から来るものであるならば、それは悲しい。が、この小説を、不在の夫をひたすら待ち続けた女が、暴力的に肉体を奪われ蹂躪されたための一種の報復とする見方は、はたしてそれほど可能だろうか。そのために今は、邪魔者となった情夫を抹殺する。そういった理由には、彼女の言うような、悪い男に身を任せた女の弱さが語られれば語られるだけ、同情としての正当性が付与されていくのも事実だろう。夫の暴力に苦しめられた須村さと子の言い分を信じたのは、なにより同性である婦人評論家の高森たき子だった。芳子は当初夫が帰ってきたら、「すべてを白状して裁きを待つ」と述べていたが、杉本によって、第二の殺人が失敗に終わった後でなされるこの告白において、杉本を通じて彼女の偽らざる遺書を読まされる読者の立場は、あの高森たき子女史の立場に、微妙に近似していくことは避けられないのではないだろうか。

一方で、彼女は、男の情婦の存在に嫉妬を煽られ、情愛を濃くせざるを得ないでいたことを、「それにわたしが、いくぶんでも、のったというのは、どういう心理からでしょうか」と同じ手紙の中で書き綴っている。潮田芳子とは、明らかに、こういった、引き裂かれた身体として自己を意識せざるを得ない存在でもあった。そして、彼女の罪障感とは、単に肉体を他の男に任せた以上に、そうした深部に巢食う「戦後」の浸食された自己の肉体だったとするならば、それこそが同じく未来を夢見て、夫を殺害した須村さと子とは、異質な翳りを帯びることとなりはしないだろうか。

彼女はやがて来る未来に賭けた。その意味では、須村さと子と近似はするが、殺害に向かう際に目に入った「何かがそこで始まろうとしている」示唆的な山の稜線の行方は、永く先が見えない未来を待ち続けることに馴らされた彼女にこそ見ることの許された、限られた白日の光景だったと考えられるのである。この小説がリアリティーとして深く呈示しているのは、まさにその犯行に加担しようとする彼女の眼に映った光景の「示唆的で、いわくありげ」な姿だっ

た。

むしろ、そこからは、始められない何かを、彼女はあらかじめ見てしまっている。もしくは、見せられてしまっていた。そこでは、いまだ完全に自由に生きる「戦後」というものは十全に「女」のうちに、確立されることはない。たとえ女の弱みに付け込んだ庄田のような男を抹殺したとしても。なぜなら、また彼女の前には、新たな拘束する存在としての夫が、現れるためである。もし本当に彼女が自由を手に入れたいのなら、帰還する夫とも、あるいは清算を付けなければならなくなることも生じよう。というのも、帰って来た夫が、第二の庄田咲次や須村さと子の夫にならない保証など、どこにもないためである。おそらくそれが、彼女が身をもって知ってしまった戦後の現実だったはずだ。そういった彼女に、近づく夫を載せた船の姿が、単に明るい希望の象徴として、はたして心の中に映じていただろうか。その「動悸」すらも、喜びであるよりは、むしろ不安のそれではなかったか。小説「地方紙を買う女」が投げかけるものは、そういった極めて両義的な位置に立たされた「女」が見ようとした、見えにくい未来の姿そのものであったように思われてならないのである。

参考文献には以下のものを参照した。なおテキストには、現行の新潮文庫を用いた。

『20世紀年表』(1997年9月、毎日新聞社)

田村紀雄「日本の新聞」『新聞学』(1977年3月、日本評論社)

宮部みゆき『松本清張 傑作短篇コレクション 上』(2004年11月、文春文庫)

栗原俊雄『シベリア抑留』(2009年9月、岩波新書)

飯田祐子「清張の、女と因果とリアリティ」『現代思想』(2005年3月、青土社)

本稿は、2016年11月20日、香港公開大学で開催された、第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウムでの口頭発表に基づくものである。